

---

# 正しいお鍋の使い方

汐森遠也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正しいお鍋の使い方

### 【Zコード】

Z4267W

### 【作者名】

汐森遠也

### 【あらすじ】

飛ばされた先の異世界で、「勝手気ままな創作料理」に覚めた娘は、小さな町のすみっこで、小さな食堂を営んでいた。

彼女はある日、店を訪れたひげもじやの熊（正体：人間）から、某お屋敷への出前を頼まる。

悪名高いそのお屋敷へ出向いた彼女を待っていたのは、放つておけば調理用の鍋でもあやしげな薬を精製しようとする巨大蛙（正体：

人間) だつた。

「おれさ、あんまし太ると食べられちゃうと思うんだよね」「だれが食べるのきみみたいなゲテモノ。つてか、鍋で毒薬を精製するなつて言つてるでしちゃうが！」

「いえ、事実あの方は、狙われているのです」

見た目と声がはなはだしく不釣り合いな蛙に振りまわされる娘。

やがてその周辺に、無駄に艶やかな謎の童女が出没しはじめる。

レモンによく似た果実から絞った果汁に、白百合もじきの蜜を加えて、小さなお鍋でことこと煮こむ。

リュス麦を粉にしたものと塩水で練つてうすーく伸ばした生地に、バティのお乳から作った桜色のチーズを塗つて、玉葱と緑色唐辛子と、黒こしょうをまんべんなく散らす。

それを窯の中に入れて、あとはときどき様子を見ながら、焼きあがるのを待つだけ。

さて。

なにを隠そ、こじは食堂だ。……いや、べつに隠してはいないけど。堂々と表に看板を出してるけど。

ともあれ、この小さな食堂、アメイロタマネギはわたしが、勝手気ままに創作料理をふるまつ場所である。別名、わたしの城。

そして、わたしの名前は麻倉律也。

こことは違う場所 陳腐な表現でぶつちやけるなら「異世界」で生まれ育った、かつての女子中学生である。

わたしは少ななくとも三つの点で、幸運だったのだと感づ。

一つめは、右も左もわからぬこの世界に落ちてきてすぐ、多少

性格に問題はあるものの他人に甘いお爺さまに拾われたこと。

「つめは、そのお爺さまが、やたら教え上手な元・教師であつたこと。

そして「つめは、」こちらの世界に、食材が豊富にあつたことだ。

わたしがこちらの世界に来たのは十一歳、中学入学後すぐのとき。そこから三年は、こちらの生活に慣れることとこちらの言葉を覚えることで必死だった。予想もしなかつた中学三年間になつたわけだ。

今のがわたしの人格形成に多大なる影響を及ぼしたその三年間は…まあ正直一度と経験したくないようでいて貴重な体験ばかりだつたわけだが、ぐだぐだ語つておもしろい話でもないので割愛する。

ともかく、そのやたら密度の濃い三年が過ぎてようやく一息ついたとき、わたしはたとあることに気がついた。

つまり、 おもしろい、と。

こちらの生活になじみかけたわたしが衝撃を受けたのは、料理のバリエーションの少なさだった。

食材はいろいろな種類があるのに、加工の仕方がなんともワンパターンなのである。たいてい生のままか、焼くかの一択だけ。

素材の味を楽しむという意味ではありなのかもしれないが、こちらの食べ物に不慣れなわたしには無理だった。だってね、味はともかく、さらさらしたりごわごわしたりちくちくしたり、未加工では舌触り的によろしくない食材が多いんだよこつちには。

ただ、舌触りの悪さにさえ目をつむれば、こちらにはわたしが元いた日本という国に存在していたものとそっくり同じ、またはよく似た、あるいはどことなく面影を感じさせる食材もたくさんあつた。そこでわたしはどうにかして、自分になじみのある、自分がおい

しぐ食べられる料理を作りだそうと決めたわけである。それまで電子レンジとやかんくらいとしか仲良くしていなかつたわたしが、鍋や「蒸やら薪やらと全身全靈のおつきあいを始めたわけだ。

結論から言つと、ものすごく大変だった。

一口の味見で失神したところを介抱してくれ、鍋ごと丸焼きにしたところに瓶ごと水をぶっかけてくれ、どうにかこうにかできあがつた料理ならぬ生成物を黙々と試食してくれる爺さまの存在がなかつたら、とうの昔に投げだしていただろ。

まあしかし、そんな苦闘の日々が続いた三年め、わたしが作りだした実に何万個めかの生成物を口にした爺さまがぽつりと言つたのだ。

「これなら、食べたいという物好きもいるかもしけんの」、  
と。

基本的に、わたしは褒められれば舞いあがりその気になる性格である。それは、ある日突然異世界かつこ笑いかつこ閉じなんぞに飛ばされ、いろいろ、本当にいろいろあつた今でも変わっていない。

そこから、爺さまが昔塾として使つていた小屋を食堂に改装して、今にいたる。

がらりん、と。

扉につけてある鐘が鳴った。

奥で調理をしていても来客に気づけるよう、と取りつけたこの鐘、お客様にはおおむね受けが悪い。なんだか開けてはならない扉を開けてしまった気持ちがするそつだ。はるばる町ふたつ越えた向こうの山まで行つて発掘してきたのに、なんとも心外な言われようである。

それはともかく、リュス麦と桜色チーズのピザもどきが焼きあがつた瞬間やつてくるとは、聞のこよお密だ。わう思ひながら、わたしは窓の扉を開けた。

とたん、焼けた生地の香ばしい匂い、ぐつぐつと泡立つチーズの幸せな匂いが小さな食堂中に漂つ。

「いらっしゃい。ちよつび、『桜色チーズに真珠玉葱と緑色唐辛子のピザ』が焼きあがつたところだよ」

開かれた扉のまづを見もせずに立つて、わたしは慎重に窓からピザを取りだす。

桜色のチーズにはこんがり茶色の焼き目がついて、緑色唐辛子は焦げることなく、スライスした玉葱はチーズからとろける油にコーティングされて、真珠のように思つてゐる。

ああおいしそう、上出来上出来、と皿画自贅していたわたしは、だけど次の瞬間顔をしかめた。

この幸せなチーズの匂いを圧倒して、食堂にははなはだよろしくない臭いが、開いた扉のほうから迫つてきていった。汗と泥をぐつぐつ煮こんだような、この臭いは。

「コツヤ殿ー！」

響く、がらりと、なんてドアベルの音がかわいらしく思える、破鐘のよつな声。

ピザをすべらかな木皿に移して窓の扉を閉め、わたしは立ちあがつた。

## 1・ひげもじや熊の嘆願

「戸口でわめくんじゃないよナキ。きみは借金取りかなにかかい」

あと食堂へは汗を流してからおいでと言つたら、とつけくわえれば、戸口に仁王立ちした髭面の大男。そのくせ黒田がちの瞳だけはやたらうるうるとつぶらである。は、しゅんと、見ていくほうが窮屈なくらい肩を縮めた。

「も、申しわけない」

……小山のような巨体で強面なのに小動物を連想させられるつて、この男ぐらこじやないだろ？

わたしは息を吐いた。

「……まあ、いいけどね。入つてくれば？ 今ならほかにお客もいないから、食堂にあるまじき汗ぐさ泥ぐさも大皿に見てあげる」

むさ苦しい男ではあるが、嫌いではない。基本わたしは、わたしの勝手気ままな創作料理をおいしいと受け入れてくれた生き物は好きなのだ。この髭面男もそのひとりだった。

だけれどそんなわたしの申し出に、髭面男 ナキははつとしたよつに顔を上げ、ぶんぶかと首を振った。汗らしきしづくが、もじやもじやの髪からまわりに散る。

「きみねえ

「お申し出はありがたいが、今回自分はそれより大切なお願いが  
つて来たのですリツヤ殿！」

「はあ？」

「我が屋敷の『主人のため、出前をしていただきたい』」

「……は？」

それから約半時間かけて、ナキが訴えたところによると。

ナキが門番として仕えている屋敷の『主人さまは、前々から趣味  
に没頭するあまり、食事をおろそかにする傾向があつたらしい。

おろそかもおろそか、一日三食きちんと出されているにもかかわ  
らず、あやうく餓死しかけたこともあつたとか。ナキは、主は好奇  
心を刺激されたこと以外にはとことん無関心・無頓着な方ですから、  
とフォローしていたが、わたしに言わせればたんなる自業自得であ  
る。

その『主人さまが、最近また趣味に熱中しすぎて餓死寸前の状態  
になつてゐるらしい。屋敷の者が躍起になつて食べさせようとして  
も、一口受けつければいいほうだとか。

子どもか、というのが、わたしの正直な感想だったのだが。

「そこで自分は思ったのです、リツヤ殿の料理ならば、主も興味を示されて、食べてくださるのではないかと！ なにしろリツヤ殿の料理は、このあたりでは見かけない、めずらしく美味しいものばかりですから！」

「……ありがとう」

拳を握り熱弁してくれるナキに、とりあえず礼を言う。

「そつ、屋敷の使用人頭殿にも申しあげたところ、ぜひリツヤ殿に料理を持ってきていただくなよ」とのことでした。どうか、リツヤ殿！」

すずいと、ナキが一気に距離を詰めてくる。暑い暑い。

「むろんお代は割り増しでお支払いすると、使用人頭殿が言つておられました。屋敷までは自分が責任もつて、送り迎えをさせていただきます。どうか、お願ひいたします！　自分が感動したリツヤ殿の料理を、主にも食べていただきたいのです！」

ナキの褒め言葉はいつだって大げさだけれど、嬉しい。ふだんのわたしなりも「」の時点で、ほいほいと出前を丐を吸けていただろう。

だけど、

「……それって、わたしもお屋敷に行かないどだめ？」  
「お屋敷まで運んでもうつぶじやだめなの？」

今回、わたしは泣つた。

「いえ、その……」

ナキの勢いが、目に見えて落ちた。

「……使用者頭殿が、作った者の顔の見えない料理を主に出すわけにはいかないと」

わたしは溜息をついた。

その溜息をどう解釈したのか まあなんとなく予想はつくが、ナキが両手を振りまわす。

「ち、違うのです！ 自分はリツヤ殿を信頼しています！ 使用人頭殿も、リツヤ殿を疑つておられるわけではありません、しかし、」

「わかつてゐよ、主なんていわれてる人の口に入るものに、その部下が氣を尖らすのは道理だ」

だから、調理した者も連れてこい、と。使用者頭とやらの言い分は理解できる。

理解はできるけれど、氣が向かない。

だつて、ナキが仕えるお屋敷については、よろしくない噂がたくさん飛びかっているのだ。

この町の、隣の隣の都はすれにあるとこ、ナキが仕えるお屋敷。

その屋敷の中には毒蛇がうよつよしているとか、食用の大蛙が這いまわっているとか、死人が歩きまわっているとか、人骨が散らばっているとか。屋敷の窓という窓は黒い布で閉ざされていて、なか公にはできないことをしているのだろうとか、ときおり屋敷の中から爆発音や金切り声が聞こえるとか、幼い女の子が屋敷の中に引きずりこまれていったとか、エトセトラ、エトセトラ。

噂というものはおもしろおかしく伝わるものではあるけれど、それにしたって、そんな話のあるお屋敷に、進んで行きたいとは思えない。

だからわたしは躊躇した、のだけれど。

「お願いいたします！ リツヤ殿の料理はめずらしくして絶品、必ずや主もお気に召すはずです！」

……そんなつぶらな瞳で見つめないでおくれよ、ナキ。

からからからから。

わたしは今、ナキの牽く荷車に乗つてゐる。

膝に大きなバスケットを抱えて。

水玉模様の布をかぶせたバスケットからは、空腹を誘ういい匂いが。

と、ここまでいえばおわかりいただけるだろうか。

わたしは、いわゆるつぶらな瞳といつやつに弱いのだ。

ナキはわたしをお屋敷まで運ぶために、荷車を持つてきいていた。よくリュス麦の大袋などを運搬するために使われるやつだ。……わたしは荷物か。

ひとつ息を吐き、わたしはバスケットを抱きしめたまま、からころと流れしていく町並みを見る。

もうすっかりなじんだ、わたしの町だ。いくつもの煉瓦で舗装された通り、キャラメル色やミルクティ色の、背の低い家々。ビスケットみたいな扉に、チョコレート色のドアノブがついている。

よく食堂に来てくれるお客様とすれ違つ。一応手を振つておいたら、不思議そつこしながらも振り返してくれた。

町を出ればほどなく、深緑色の森が広がる。この森を抜けた先が隣町だ。

不思議植物の宝庫であるこの森は、そのぶん動物も多い。中には人を襲うものもいて、わたしがこちらに来て真っ先に爺さまに教えられたのは、ひとりでは決してこの森に近づかないよつこということだった。

そんな森へ今、わたしの乗る荷車を牽いて、毛むくじゅうの熊みたいなナキがのっしのっしと分け入つていく。

木立を縫うよつに進んで、振り返つても森の入り口が見えなくなつた頃、ナキがぴたりと歩みを止めた。

「リツヤ殿」

低い呼びかけを受けて、わたしは荷車から降りる。

ナキの足音と、荷車の車輪の音が止み、静かになつた森の中。耳を澄ませば、わたしたちを取りかこむよつに、いくつもの息づかいが聞こえた。

「囮まれたね」

「申しわけありません」

「ううん。 しながらこう音立てながら進んでちゃしかたないよ。 これの匂いもしてるだらうしね」

これ、とバスケットを掲げて見せて、わたしはそっと視線をめぐらす。

生い茂った枝葉が日を遮る、森の中は緑めいて薄暗い。

その、いつそう暗い木立の向こうに、息づかいの主たちはいる。

狼に似た茶色いやつか、虎に一角が生えたような黒いやつか。木立の向こうの闇に潜む、その姿はまだ見えない。

が、まずまちがいなく、肉を食う大型の獣だろう。その証拠に、さつきまでそこそこにあった、小動物の気配が消えている。

いつしか空気は、弓弦のように張りつめていた。

やれやれ。

わたしがバスケットの中に手を差し入れたのと、

「じ心配は無用です、リツヤ殿！」

ナキが、この緊張しきつた空気完全無視の大聲を上げたのが同時だった。



### 3・ファーストコンタクト（前）

「到着いたしましたリツヤ殿！」

「……お疲れさま」

振り向いたナキの口に緑色唐辛子の肉詰めを突つこんでやりながら、わたしは荷車から降りた。

ちなみにこの料理、わたしが今暮らしている町ではわたしの創作料理として知られているが、元ネタはもちろん、わたしが日本でよく食べていたピーマンの肉詰めである。こちらの緑色唐辛子が、ほとんどどこぶし大のピーマンといつてさしつかえないほどピーマンそつくりの見ためをしていたことからひらめいた。

作り方は簡単。緑色唐辛子を半分に切つて、中の種をきれいに取りだしたのち、口ウロという真珠のような花から採れる油を薄く全体に塗る。そこへ、バティの挽肉に赤い香味野菜のみじん切りと黒胡椒もどきを加えよく練つたものを詰めこんで、むらなく焼く。

焼き上がりは、緑色唐辛子を“味”と包みこんだ口ウロの油が真珠の“”とく輝き、香味野菜と黒胡椒が香り、透明な肉汁がじゅわりと染みだし まあ、それは今はどうでもいい。

「美味です、リツヤ殿！」

「そう、それはよかつた」

緑色唐辛子の肉詰めは冷めてもそれなりにおいしいからお弁当にも向いてるんだよ。まあ、それも今はどつでもいい。

田の前に広がる景色を見て、わたしは溜息をついた。

到着してしまった。ここからが正念場だというのに。

乗り物酔いと精神疲労で、コンディションは最悪だ。

あのあと 森で肉食獣に囮まれたあの、ナキの活躍、もとい暴走はすごかつた。

手近な大木を引っこねいて振りまわし、向かってくる肉食獣を文字通り吹っとばしながら森を駆進、その勢いのまま隣町もあつとう間に通過してこの都に突入し、大通りの華やかな人々を跳ねとばしながら都のはずれまで突きすすんで、止まった。

本人は、人食い獣からリツヤ殿をお守りせねばと夢中でしたてへ、とかいつていたが。そのリツヤ殿は、時速二百キロは出でいそうな荷車から放りだされないようにと命がけでしがみついていた。

帰つたら爺さまに、この世界の人間の身体能力について確認しそう。個人差こそあれ、わたしが元いた世界とそう変わらないと思つていたのだけれど、もしかしたら認識違いだったのかもしれない。少なくとも元の世界ではわたしに、片手で大木を引っこねいたり、新幹線とほぼ同じ速度で走つたりする知りあいはいなかつた。

「 で」

気持ちを切りかえるべく頭を振つて、わたしはあらためて目の前に広がる景色を 灰色の絶壁に背を守られたたずむ、焦茶色のお屋敷を見つめた。

平屋建てで、高さはない。そのかわり幅は、わたしの小さな食堂が軽く八件は入りそうなほど広かつた。老木から造られたような焦茶色の外観は、なんとなく、廃校になった古い木造校舎を思わせる。

そんなお屋敷の窓といつ窓は、噂通り、内側から黒い布で塞がれていた。中にだれがいて、なにをしているのか、いつさい窺い知ることはできない。そもそもここのは都のはずれもはずれ、近くに民家はひとつだってないのだから、わざわざ窓を塞ぐまでもなく、屋敷の中を人に覗かれることはそうそうないはずだが。

お屋敷の左手には枝垂れ柳の木がある。日本にもあつた枝垂れ柳とまったく同じものかどうかはわからないが、よく似ていた。湿気を含んだ風にゆらゆらと揺れている。

お屋敷より背の高い、その枝垂れ柳の木の下には、どう見ても墓石だらうものが置かれている。卒塔婆もどきの木片もお屋敷を囲うように、六本ほど地面に突き刺さつていた。

なにか出る雰囲気満載だ。 わたしがそんなことを思つていたとき、

「 あやあああああ！」

高い、女の子の悲鳴が聞こえた。

続いて響く、爆発音。

「なに」と？

反射的にバスケットをかばつたわたしは、次の瞬間田を疑つた。

ぬるり。

お屋敷の、向かつて左側の壁から、女の子の頭が生えてきていた。

#### 4・ファーストコンタクト（中）

黒髪の、女の子だった。すだれのように垂れたまっすぐな髪の隙間から、見えた頬は病的なまでに白い。

見ているうちに、女の子の頭は完全に壁から抜けだし、続いて上半身が、それから下半身が現れた。

生首ではなかつたわけだ、とわたししが吐息を漏らしたと同時、つまさきが完全に壁から離れ、女の子がするりと浮きあがる。

「そう、『浮きあが』つた。

壁から生えてきた時点でただの女の子でない」とはわかっていたが、これはもしや、

「幽霊……？」

枝垂れ柳の木の下に、今女の子は浮いている。「女の子」というよりも、「童女」といったほうがしっくりくるかもしれない。

黒髪を肩の上で切りそろえた彼女は、鮮やかな着物を身にまとっていた。その出で立ちは、日本のわたしの家にあつた、雛人形を思いださせる。

「ひらの世界で暮らして七年目になるけれど、その間わたしはひとりとして、こんな和の格好をした人に出会つたことはなかつた。その事実がさらこ、童女を異質なものに見せる。

そして、わたしは田の前のお座敷にまつわる、ひとつの一樽を思いだしていた。

つまり、「幼い女の子が、屋敷の中に引きずりこまれていった」、という樽を。

その女の子の怨念が化けて出たんじゃなかろうかと、なかば本氣でわたしが考えたとき、

童女がちらりとこちらを見て、田が、合ひた。

「え……」

わたしは息をのむ。

童女は、金色の田をしていた。瞳孔は黒く、縦に裂けるように細長く伸びていて。蛇の田に、よく似ていた。

血色を失い、青白いまでの肌に、唇だけはぷつくりと紅くつやめいている。その顔立ちは人形のようだ、つまり自然ではありえないだろうと思つほどに整つていた。……が、整いすぎでいて逆に恐ろしいと、わたしは感じた。

まとう異質な雰囲気と、人形じみた容姿のせいで、年の頃はわからない。ただ、背格好から判断するなら、まだ十歳前後の童女だった。

そんなことを考えている間にも、ずっと、わたしと童女の目は合っていたのだが、やがて童女のほつがふいと、興味をなくしたよつこ、視線をそらした。

そして次の瞬間、すりつゝと、空氣に溶けるよつて消えていった。

「な……」

なんだつたの、ヒ、眞むうとしたわたしの声は、

「なんで、なんでなんで毒蛇地帯も死人防衛線も抜けて、もう嫌だああ！」

再び屋敷のほうから上がった、半泣きの声に遮られた。

「わかに、今まで死んだよつに静まりかえつていた、屋敷の中のほうがやわらかはじめぬ。

「主さま、どうか落ちつかれて」

「だれか、温かな飲み物でも」用意しろ！」

「もう行つちまつましたよ、俺が確かめできましょ！」

そんな声と一緒に、お屋敷の、まわりの外壁とまったく同じ材質の、玄関扉ががちゃりと開いた。

それはもう、あっけなく。

そして出でてきたのは、サーモンピンクの髪をした若い男だつた。今年で十九になるわたしど、おそらくは同年代。臍臍色のチュー

ックと、紺色で細身のズボンの上に白衣を着ている。田は空色で、左目にだけ、薄い金縁のモノクルをつけていた。

チユーニックとズボンの組み合わせは、いかがらの男性の一般的な服装だ。それはいい。白衣は、こぢりではあまりお田にかかるものではないが、それもまあいとしよう。

しかし、サーモンピンクの髪については……あ、南西の生まれなら可能か。

この世界は大きく五つの地域に分けられる。北方、東方、南方、西方、そして、中央。

そして、元教師の爺さまいわく、この世界では髪の色を見ればある程度生まれた地域の特定が可能らしい。黒系なら北方、青系なら東方、赤系なら南方、白系なら西方、黄系なら中央、というふうだ。

そう考えるならピンク色は、赤系と白系の交わる南西生まれ、と予想できるというわけだ。ちなみに、北方よりやや中央寄りにあるわたしの町には、黒に若干黄色を混ぜたような、茶系の髪色が多かつたりする。

……それでも印象の強い頭だ。正式な名前がわかるまで、便宜上鮭と呼ばせてもらおう。

その鮭は、扉を開けてこひらの姿を認めるや、ぶんぶんと手招いてきた。

「なんだ帰つてたのかよナキ、早くこひち来い、主さまをなだめんの手伝え」



## 5・ファーストコンタクト（後）

「……またですか」

わたしのななめ前に立つナキが言う。わたしの位置からは見えないが、きっと心配そうに眉をひそめたのだろうと、声色でわかった。

「そうそう。主さまあー」つい門番が帰ってきたんでもう大丈夫ですよー」

屋敷の中に向かってそう叫んでから、鮭頭はくりん、と再び「」を振りかえった。

モノクル越しの左目がすがめられ、わたしを見る。

そして、次にその薄い唇がつむいだ声は、打つて変わつて硬質だった。

「……で、なにその女」

鮭頭の、空色の目が探るように、ナキとわたしを交互に捉える。

「おまえの女、じゃあねえな。人間だし」

じるじろじろ。不羈な視線とはきっとこういうものだろう。たしかにわたしは不審人物なのかもしれないが、一応仮にも頼まれてやって来た身だ、そこまで警戒されるいわれはない。

眉を寄せたわたしのななめ前、かけらも毒を含まない声で、ナキが答えた。

「料理人殿です」

「……あーあーあー、ササマの絶食対策につれてぐるとかいってたあの」

話は聞いていたらしい。鮭のまなざしから硬さは消えた。

が。

「こーんな小娘がねえ」

かわりそそがれた見下したような視線に、ゆらり、わたしの感情が揺れた。

……端的にいうなら、いらっしゃった。

「見たところアナタだって同じような歳だと思ひナビ」

言われっぱなしは癪なので、たわやかな反撃を試みる。

しかし、あくまでナキの立場を悪くしない程度のささやか加減だつたせいか、鮭はまつたく応えていない様子で肩をすくめた。

「ササマを食わせるにゃ役不足に見えるけどなつて話だよ」

ああそりですか。

まーまー」と一いちりへ視線を向けてきたナキへ、わたしは安心させ

るよつに小さく笑つてみせる。そこへ、

「玄関を開け放すな、ラミナ」

低い、やたら威厳のある声が通つた。

鮭頭の背後、扉の奥の闇から浮かびでるよつにして、白い髪の老人が現れた。

老人は頭のてっぺんには髪がなく、耳の上あたりから床へつくほどまでに白い髪が伸びていた。鼻の下から口元を隠して伸びる白い髪もまた足元まで伸びている。踏んづけてこけないのかな、などと失礼な考えがよぎつたが、心の中のつぶやきなので勘弁してもらおう。

ともあれ、老人はゆっくりとこちらへ歩み寄つてきていた。

しつかりとした足取りだ。右手に、先端が渦巻き風のようになつた、背丈より高い杖を持っているが、それを歩行の支えにしている様子はない。杖や、この屋敷の外壁と同じ、長い年月を経た老樹のような、焦茶色のロープを着ていた。

やがて扉から一歩出たといひで立ち止まつた老人は、ナキを見て、それからわたしを見て、薄く目を見開く。

それから、ゆつたりと灰色の目を細めた。

「よつじやおいでくださいました」

言いつつ、老人はちらと横目で鮭頭を睨めつける。

「お客様がいらしているのに、ご案内もさしあげないとは。使用者の教育が行き届いておらず、お恥ずかしいかぎりでござります。なにとぞご容赦くださいませ」

「いえ」

わたしはただ首を振った。見下されるのはたしかに嫌だが、いきなり平身低頭で来られるのも対応に困る。だってわたしはそんなごたいそうな人間ではない。

……ナキがどう説明しているかは知らないが。

なんとなく嫌な予感がしたわたしの前で、

「私はこのお屋敷の使用人頭を務めております、モアレムと申します」

老人が名乗った。

そして、その名乗りが合図だったかのように、老人のうしろから、人影がわらわらと現れた。七、八人はいるだろうか。全員、深緑のローブを着ている。

その深緑のローブ集団に、わたしはあつという間に取り囲まれた。

「貴女が珍妙な料理をふるまうという料理人殿ですか」

「「」」なんなお若い娘さんだつたとは

「その籠に料理が入つてゐるのですか？」

「おお、なにやうじよい匂いが

珍妙つてなんだ。

小娘でじめんなさい。

うん、そうですけど。

ありがとう？

頭の片隅で淡々と返しながら、わたしは内心顔を引きつらせていた。もしかしたら表にも出ていたかもしれない。

なにこの大歓迎。歓迎というか、むしろ逃がすまい、って感じで囲まれてるんですけど。

深緑ロープ集団の田はざわわざりしている。少なくともわたしにはそう見えた。なにこれ怖い。

これならまださつきの鮭頭、もといラミナの反応のほうがよかつた。分不相応の期待をされるのはプレッシャーがすごいし、期待に応えられなかつたあとが怖い。

輪の外で、他人事のように肩をすくめているラミナが憎い。いや、実際他人事なんだろうけど。つまりこれはたんなるわたしのハツ当たりだけど。同じく輪の外でおろおろしているナキは、うん、罪

がないから許してあげよつ。

そんなことを思つてゐる間にも、さあさあこひりです、と背中を押されて、わたしは屋敷の中につけこまれていた。

四方八方を深緑ローブに包围されたまま、照明のない、暗い廊下を進まされる。

背後で扉の閉まる音がした。とたん、周囲が完全な真つ暗闇になる。

なにも見えない。ただ、周囲の人の息づかいと、ローブの衣擦れの音だけが聞こえる。

ちょっと待つて、冗談抜きで怖いんですけど。

「あの　つ」

ナキは、とわたしのが言いかけたとき、目の前で、扉の開く音がした。

開いた扉の向こうは、ぼんやりとした翠色の光に満たされていた。

木肌そのものな焦茶の壁の、四隅に鈍い金の燭台が引っかけられ、そこに、螢の光にも似た、翠の炎が灯つて揺れている。

やはり焦茶の、調理台らしき設備が部屋の真ん中にじんと置かれ、それを囲むように黒い鍋やら調理器具やら、包丁やらが乱雑に散らばつてゐる。日本風にいうなら八畳ほどの、ここは厨房らしかつた。

認めたくないけど。

だつてこの、厨房かつて仮かつて閉じにま、わたしの頭ほどもある、巨大な蛙がいたるといふ飛びはねているのだ。翠の灯りに照らされて、縁の背中がてらてらとつやめこていふ。

食用の巨大蛙が這いまわつてこるは本当だつたのかと青ざめたとき、

調理台の向いに、なにかがじわっと動いた。

いわゆる皿所害虫ではない。昔からしてそんなサイズではない。そうだつたし、あつがたいこと、ひかりの世界にやつりはない。なんだ、と皿をひらしたわたしのひしりの皿で、

「ひとなどこでなにしてんすか主ちゃん」

ハリナの声がした。

……は?

ぬしゃま?

あれよろつ。調理台の向いから、覗く巨玉が一つ。

「……ナリ」

こんもりと。小山のような巨大蛙が、そこにいた。

「……なにこれ」

「主人です」

答えた、使用人頭だという老人、モアレムを、わたしは振りかえった。

「ここ」の主人つて蛙なんですか

「いえ、これはその

「げこ」

「完つ璧に蛙じゃないですか」

「あ、まちがえた」

背後から、声が聞こえた。

わたしはとつさに、背後にいる唯一の生命体、巨大蛙へと向きな  
おる。

今聞こえたのは若い声だつた。だけど鮭頭 ラミナのものでは  
ない。もっと淡々として中性的な、アルトとテノールのちょうど中  
間くらいの高さの声。

まさか、と見下ろしたわたしと、見上げてくる巨大蛙の翠の目が、ぱちり、と合つた。

巨大蛙の、口が開く。そして、

「君、なに？」

「まごうことなき、人語をつむいだ。」

「…………ですから、この方が我々の主人なのです」

唚然としたわたしのうしろで、モアレムがいうのが聞こえる。

「このお屋敷の主。ゴリエスさまと申しあげます」

「…………屋敷の主は、蛙の血を飲むのが好きな変人だつて…………だから屋敷の中には、食用に飼われてる巨大蛙が這いずり回つてゐるつて……」

そういう噂だったのに、まさかその蛙のうち一体が本人だったとは。

「と、いうか、

「なんで喋るの、蛙なのに」

わたしが、なかばひとり」とのように漏らせば、巨大蛙はぎょりとその目を動かして答えた。

「人間だから」

……いやいやいやいや。

「どう見ても蛙だけだ」

大きすぎるけどさ。ヒキガエルを巨大化したらまさにこんな感じだろう。

ただまあ言われてみれば、エメラルドのような翠の田には、人間的な知性が宿つていてそこに見えないこともない。

「この姿には深くて浅い理由があるんだよ」

「……なにそれ、魔女に魔法をかけられたとか？」

たしかそんなおどき話が、日本にはあったような

「なにそれ」

……違うのか。

じつらの常識は今でもたまによくわからない。人間がそう簡単に蛙になれるものだったか？

これも、帰つたら爺さまに聞くことコストに追加して、わたしは別の質問をすることにした。

「とにかくで、わたくしの悲鳴はなに？」

蛙がきょろりと田を動かした。

「なんのこと？」

「女の子みたいな甲高い悲鳴だよ。さつき聞こえた。主さま、どうか落ちつかれて、とかなだめられてたんだから、あなたが上げた悲鳴なんじゃないの？」

蛙がふい、と顔をそむけた。

「知らない」

……たしかにあれはアルテノールよりもっと、ソプラノに近い、高い悲鳴だったけど。

しかし、ところどころは。

「女の子を幽閉したりしてないだろ？」

噂のひとつを思いだしてわたしが聞えれば、案の定、蛙はまたこう返してきた。

「なんのこと？」

わたしはひとつ溜息をついた。

いい、深入りはするまい。好奇心は猫を殺す。そもそもわたしが今日ここに来たのは、探偵じっこをするためじゃない。

そうでしょう、と視線をやれば、モアレムが心得たよじつけなずいた。できた使用人頭だ。

「ユリエスさま、お食事をなさつてください」

足元まで廻く白い髪のモアレムは、穏やかだけれど毅然とした調子で言った。

「しかし、リツヤ殿が、めずらしい料理をお持ちくださいました」

どうしてこうなった。

今、シチュー作成中のわたしの隣で、巨大蛙が、毒物生成中である。

なにが悲しくて、バティのお乳に野菜とお肉をたっぷり加えた栄養満点。ピンクシチューを、ど紫の、ときおりなぜか火花が散つている、アイアムポイズンと全身で主張しているような液体のそばで作らにやならんのか。

どうしてこうなった、かは、わかっていない。

お食事をなさってください、というモアレムの言葉を、この人語を操る巨大蛙 コリエスが、やだ、とにかく斬りすてたからだ。

コリエスはそれから、ぼってぼってと移動して、長細い舌を使ってお玉やらなんやらを器用に引き寄せるど、なんと厨房の鍋を使つて、現在も進行中の毒物生成を始めた。

この、毒生成 モアレムいわく「お薬作り」こそ、コリエスが食事をおろそかにして没頭している趣味なのだそうだ。

そうして鍋からもくもくと不穏な煙を立てはじめた主の背中を溜息まじりに見つめたモアレムが、わたしにひとつのお願いをしてきた。

ゴリエスさまの隣で、なにかこゝへ めずらしくて、おこしあうな匂いのする料理を作つていただけませんか、と。

材料はこちらで用意いたします。すぐそばで作つてこるといふを見れば、ゴリエスさまも興味を持たれて、食べてみよ、とお思いになられるやもしれませぬ、と。

それで、……どれだけこの蛙に甘いんだと思つても、わたしはうなずいてしまつたわけだ。

理由は単純に、無駄足になるのが嫌だつたから、なんだけれど。今はちよつと、いやかなり、後悔している。

といつあえず皿下の手段として、できるだけ右隣の蛙と鍋は見ないようにして、貸し与えられた自分の鍋だけを一心にかき混ぜていた。もしかしたらこの鍋でも過去に毒物生成していたかもしれないなんて、考えたら負けだ。

……だから、背後からひそかにじよめきが上がるまで、隣のど紫スライムをかき混せる音が止んでこることに気がつかなかつた。

「ねえこれ、なに？」

なんのどよめき？ と尋ねるより早く、ゴリエスのアルテノールが聞こえた。ただしわざまでと違つてずいぶん高い位置 わた

しの耳の上あたりから。

なんで？ あの蛙は巨大だつたけれど、縦の長さはわたしの胸あたりまでだつたはず……とそこまで考えて、わたしの思考は一時停止する。

真珠のようないしの白い手が、内側から光を放つてゐるんじゃないかなつていうくらい白い、ほつそりした手が、右隣から伸びて、わたしのお鍋を指していた。

……まぎれもない、人間の手が。

「……っはあ？」

あわてて身体ごと右隣へ向いて、わたしは絶句した。

……まぶしい。

それが第一印象だつた。

全体的に色素が薄いのだろう、じくじく淡い、金の髪。肩まで伸びて、寝起きのように、わりと好き勝手に跳ねてゐる。それでもぼさぼさした感じがしないのは、髪の一本一本が纖細な絹糸のように細いからか。

服装は、白い、日本でいうTシャツのようなだぼつとした長袖の上衣に、これまた日本でいうジーンズのような、薄黒で細身な下衣を合わせてゐる。ひとつの飾り気もない簡素きわまる格好だ。派手さのかけらもない。

なのに、「彼」の輪郭から、白い光がにじみだしてこむろつた錯覚を覚えた。

錯覚のおもな原因は「彼」の髪と肌だ。光をつむじだよつた髪と、内側から光を発しているように白い、真珠のことき肌のせいって、自分で言つて薄ら寒くなつたが、事実なのだからしようがない。

と、いつか。

「……だれ？」

ひとつのお感はあつたけれど、否定してほしくて聞いてみる。

「え、なにいまさう？」

「いいから名乗つて、今すぐ」

「ユリエス」

「……嘘」

振り向いたけれど、だれも否定してくれなかつた。それどころか、モアレムがこくつとうなずいた。

「……まじですか。

あのずんぐりじりじりしたヒキガエルのビードリフしたが、このすらりすべらかな人間になるんだ。

人間、というか、人形、にも見える。たぶん男だろうけど女だと  
いわれても違和感のない、中性的、というより無性的な顔。眠たげ  
な目を覆う、金色の睫毛は癪なほど長い。少年、というには大人だ  
けれど、青年、というには頼りない、浮世離れした空氣。

ヒキガエルなんて連想もできない。さつきの、壁から生えてきた  
童女に勝るとも劣らない、冗談みたいな美人だ。

ただ、エメラルドのよつた翠玉の瞳とアルテノールの声だけは、  
蛙の姿のときと回じだつた。

「人間だつて言つたでしょ、おれ」

……言つてたねそついえば。

「なんで蛙に化けてるの、どうやつて化けてるの」

「おれの質問が先。これ、なに？」

「え」

これつてなに、と、真珠の手が指すほうを見て、ああ、とわたし  
はつぶやいた。

「シチュー」

「じゅわう」

なんだその片言。不覚ながらちょっとかわいいとか思つてしまつ  
た。

ちゅうどできああがつたことだし、ヒ、わたしへおはるとい  
して掲げてみせる。

「食べてある？」

はむ。

効果音をつけるとするなり、そんな音。

頭の隅っこ、冷静な部分でそんなことを考えながら、わたしは固まっていた。

……シチューを食べてみるか？ とは聞いた、たしかに。そして、シチューをすくったお玉を掲げてみせたのも事実だ。

だけじゃあか、そのお玉に直接食いついてくるとは予想外だった。

「お玉もう鍋につつこめないでしょ、うがどうするの、とか、お行儀つてもんを呑わなかつたの、とか、言いたいことはこういろあらがひとまずおいて。

「……どひへー」

ゴリエスが食いついているお玉を掲げたまま、わたしは、今一番気になることを聞いてみる。

お玉に食いついたまま、ぱちり、ヒゴリエスが瞬いた。

……正確にはぱたり、か。なんとも睫毛の長こと。

「……食べたことない味

相も変わらず淡々とした、けれど、今はほんの少しだけ驚きを滲ませたような声音で言って、ゴリエスの口がお玉から離れる。それ

でようやくわたしも硬直から解け、お玉を掲げていた腕をおひさし  
とができた。……なんか突っぱってるんだけど。

ヒレード。

「食べたことない味つて、それは氣に入つたの氣に入らなかつ」

たの、とわたしのが続けるより早く、コリエスの手に手が伸びてきて、わたしの手からお玉を攫つていつた。

そして今さつき自分が食いついたそれを、躊躇なくまたシチュー鍋の中に沈める。

「あ、ひひ」

「好き」

シチューをたっぷりすくつたお玉を口にこぼこに含んだ状態で、器用にもコリエスは言つ。その言葉を聞いて思わずわたしは、咎めようとしていたのをやめてしまった。

基本わたしは、わたしの勝手気ままな創作料理を好きだと受け入れてくれる生き物には甘いのだ。

「……ありがと」

「でもね。

おお、おおまが。

コリエスおまが食事をなさつたぞ！

そんなふつにざわめいている背後へ、わたしは振り返る。

「……モアレムさん、お皿はありますか？ できれば深めのせつかり気に入つたんならちゃんと食べておくれよ。お皿に食いつくのは「食事をなさつた」とは言わない。わたしは認めない。

「 本当に、ありがとうございます」

はむはむはむはむ。

まつたく表情を動かさないまま、コリエスは木の匙で、同じく木の深皿にたつぱりよそつたシチューをどんどん消化している。焦茶の木製らしい円卓にはほかにも、緑色唐辛子の肉詰めや、海老みたいな味がする赤い木の実・コルンのパイ包みもどきなど、わたしが作つてここまで持つてきた料理が所狭しと並べられている。

そんな主を見ながら、モアレムがわたしに深々と頭を下げた。

「いいえ。こちからで、わたしの料理が気に入つてもうれてよかつたです」

「私も、しちゅうを一匙、こ持参いただいた料理を一口ずついただきましたが、いずれもこれまで食したことのない、美味しいものでした。リツヤ殿はすばらしい料理人であられる」

「……そんなことはありません」

「今まで褒められると、なんだか後ろめたい。わたしの勝手気ままな創作料理には、たいがい元ネタがあるから。今回作ったシチューなんかもまさにそれだ。日本という遠い遠い場所にあるその元ネタを、この世界の人たちが知るはずもないし、知るすべもないけれど。

「「」謙遜を。」」こちらは、お約束のお礼です。お納めください」

そんな言葉と一緒にモアレムから差し出された青い布袋は、大きさにわたしの拳ひとつ分ほどだつたけれど、

「どうぞ、お確かめください」

言われて、そつと袋の口を縛つっていた紐を解いたわたしは絶句した。

きらきらと、エメラルドのように輝くこれは、

「翠貨………？」

「」の世界のお金は四種類ある。

白貨、青貨、紅貨、そして翠貨だ。

大きさ、厚さは四種類ともだいたい同じ。日本の五百円玉を三枚重ねたくらい。

ただし価値はおおいに異なり、白貨五百枚と青貨一枚が同等、青貨十枚と紅貨一枚が同等、紅貨五枚と翠貨一枚が同等である。たぶ

ん白貨が、日本の一円と回り物のものだとわたしは見ていく。

「これから単純にかけ算すると、翠貨は一枚で一万五千円の価値があるわけだ。その翠貨が、渡された布袋には十枚入っていた。

「合計、一十五万円だ。」

「こくいらなでしもあわせます」

わたしが今回持参した料理の材料費は、せいぜい青貨六枚、三円分ほどだ。出張費と合わせたって、ぱたたくりもいとこりだらう。

「いいえ、どうかお納めください」

返そうとしたわたしを押しとどめて、モアレムがいへ。

「無理ですよ、翠貨一枚でも十分すぎるくらいです」

「欲のない方だ。しかし」

きりり、ヒ、モアレムの目が光った気がした。

「危険料、といふことで、納めてはいただけませんか」

## 8・餌付け（後書き）

じわじわとお気に入り登録が増えていく。

本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4267w/>

---

正しいお鍋の使い方

2011年11月27日15時06分発行